

## 崩壊学

パブロ・セルヴィーニョ、  
ラファエル・ステイヴァンス 著 鳥取 絹子 訳

平穩無事な日々を生きたいと願う私たちにとって、『崩壊学』というタイトルの本は良くも悪くも刺激的である。一方で、この刺激的なタイトルに、現在の地球環境問題に便乗した怪しげなキワモノと思ひ込む人もいるかもしれない。

本書は、しかし、哲学、歴史学などの人文から経済学・政治学などの社会科学、生態学、地球科学などの自然科学を含めた広汎な分野の膨大な最新の研究や資料にもとづいて、18世紀



から産業革命と資本主義を柱にして発展してきた現在の地球社会（あるいは文明）が、早ければ21世紀中頃、遅くとも21世紀末には破綻して崩壊すること、冷静で深い洞察にもとづいて断言した、極めて説得力のある警世の書である。

「崩壊」へのギアを減速するには、パリ協定などで大問題となっている化石資源のエネルギー利用は即刻ストップすべきとも主張しているが、一方で水・エネルギー・食料などの人類の生存基盤全体の危機を考えると、気候・生態系・物質循環などの自然

### 極めて説得力のある警世の書

と社会のすべての分野が連結していることを踏まえた対処こそ必要であると説く。これまでの還元論的な科学では、一つの分野での「解決」が、隣接する分野の「危機」には通用しないことも強調している。資本主義的経済は、一部の危機を糧にむしろ「成長」し、結果として有限な地球の自然に依拠した社会を危うくしてきたことも指摘する。

では、この「崩壊」にどう対処すべきか。著者の意外な答えは、強固で生き生きとした地域社会を、緊急に再構築することだと強く主張する。この地域社会の鍵は、新しいローテク、そして節約と公平の脱成長へ向けたトランジション運動である。

そこでは、「成長経済」の現代社会でみことなほど徹底的に骨抜きにされてしまった、人類が本来持っているはずの「共に生きる才能」という社会的能力の再生こそ、「崩壊」の克服を保証する、と主張して本書を締めくくっている。評者としては刺激的で、しかし腑に落ちた結論であった。（草思社 2000円）

◇  
パブロ・セルヴィーニョ 1978年ヴェルサイユ生まれ。農業技師で生物学博士。

ラファエル・ステイヴァンス ベルギー出身。環境コンサルタント。

評 哲三 安成  
総合地球環境学研究所 所長